

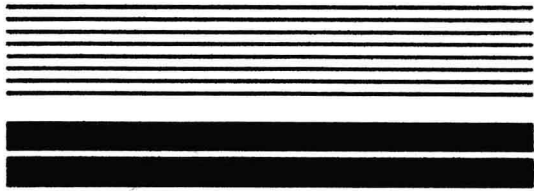
日本文学全集
51

安岡章太郎・吉行淳之介 遠藤周作

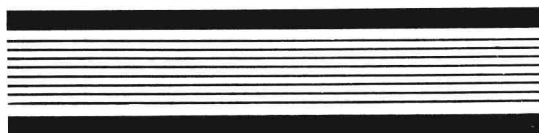


海辺の光景・悪い仲間・家族団欒図
砂の上の植物群・驟雨・鳥獣虫魚
海と毒薬・白い人・私のもの・他

河出書房



安岡章太郎・吉行淳之介・遠藤周作



カラー版日本文学全集 51

1971©

昭和四十六年 一月二十日 初版印刷
昭和四十六年 一月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者

安岡章太郎
吉行淳之介
遠藤周作

発行者

中島隆之

印刷者

草刈龍平

装幀者

亀倉雄策

本文印刷

中央精版印刷株式会社

口絵印刷

凸版印刷株式会社

製本

加藤製本株式会社

製函

加藤製函印刷株式会社

本文用紙

本州製紙株式会社

クロース

日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

電話 東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331151-0961

目次

安岡章太郎

海辺の光景……………七

ガラスの靴……………五四

悪い仲間……………三

陰気な愉しみ……………六

王様の耳……………八二

家庭……………八九

肥った女……………九四

家族団欒図……………一〇一

吉行淳之介

砂の上の植物群……………一二

驟雨……………一八三

鳥獣虫魚……………一九五

遠藤周作

海と毒薬……………二二

白い人……………二七二

私のもの……………三〇〇

	注	保昌正夫	三〇九
	年譜		三三
	解説	平岡篤頼	三七
	巻頭口絵	榊原和夫	
色刷挿画	海辺の光景 悪い仲間	横山泰三	
	砂の上の植物群	吉原英雄	
海と毒薬 白い人		利根山光人	

安岡章太郎

海辺の光景*

片側の窓に、高知湾の海がナマリ色に光っている。小型タクシーの中は蒸し風呂の暑さだ。棧橋を過ぎると、石灰工場の白い粉が風に巻き上げられて、フロント・グラスの前を幕を引いたようにとおりにすぎた。

信太郎は、となりの席の父親、信吉の顔を窺った。日焼けした頬を前にのばし、助手席の背に手をかけて、こめかみに黒味があった斑点をにじませながら、じっと正面を向いた頬に、まるでうす笑いをうかべたようなシワがよっている。一年ぶりに見る顔だが、喉ぼとけに一本、もみあげの下に二本、剃り忘れたヒゲが一センチほどの長さにのびている。大きな頭部にくらべてひどく小さな眼は、ニカワのような黄色みをおびて、不運な男にふさわしく力のない光をはなっていた。

「で、どうなんです、具合は」

「電報は何と打ったんだかな、キトクか？……今晚すぐというほどでもないようだな、まア、時間の問題にはちがいないが」

信吉は口の端に白く唾液のあとをのこしながら、ゆっくりと牛が草を嚼むような調子でこたえた。

「ほう」

信太郎は、父親が話し出すと事務的なこたえ方になった。窓をひろく開けたが、夕なぎの海面から吹きこんでくる風は熱気をおびて、車内の温度には影響がなさそうだ。汗にまみれた手頬にまつわりついてくるシャツの袖をたくし上げながら、乾いた肌着にとり換えるときの

心持を何度でもくりかえして憶い出そうとしていた。……突然、腐った魚のハラワタの煮える臭いが鼻を撲った。車のすぐ前をケタタマしい叫びを上げて、トサカまで真白くほこりを浴びたニワトリが何羽も横切った。粗末な、板片を打ちつけただけの家が、倒れそうになりながら軒をくつつけあって立っている。「部落民」と呼ばれる人たちの居住区だ。この部落がつけると、道路は平坦になり、やがて二た股になって別れる。

——来た、と信太郎はおもった。

一年まえ、運転手がラジオにスイッチを入れたのは、ちょうどこのあたりだった。古い大型の車で、運転手のとなりに信太郎が、うしろの座席に父親と伯母とが両側から母をはさんで坐っていた。後部のトランクに夜具がひと揃い収めこまれてある……。波長のととのわないラジオは部落をとおりこすと同時に、高く鳴り出した。漫才をやっていた。どっと起った笑い声の中から、女のカナキリ声が聞えた。とめてくれ、信太郎は云いつけようとしたが、口をひらきかけたまま言葉が出なかった。運転手は黒い皮の手袋をはめた手を得意そうに上げると、いきおいをつけるようにハンドルを切った。細い路地の両側に茶店の赤い小旗が目についた。狼狽して信太郎は云った。

「ちがうんだ、この路じゃなかった」

「……………」

運転手はブレキを踏みながら、不服そうにサン・グラスの眼を向けた。うしろから伯母と父とが体をのり出した。バック・ミラーに小さく母親の顔がうつった。笑っている顔だった。漫才の女のうたいだした流行歌にあわせて、自分もいっしょに口ずさんでいる。

「K浜ですらう、K浜なら……」

運転手の声はイラだしたげに、車の中じゅう響きわたった。父親が何か云いそうになった。信太郎は、父親ののりだした姿勢を抑えるために声をはり上げた。

「ちがうんだ。……K浜のちかくなんだが、すこし手前をまがるん

だ」

車のまわりに人がよってきた。茶店のとなりで、軒先に吊るされた青や赤の水着がゆれた。運転手は舌打ちした。

「K浜へ行くというから、K浜かとおもうたに……。曲るのはどっち？ 右、左？」

「左だ。しかし、どっちにしても、すこしバックしてもらわないと……」

「バック？ バックして一体どこへ行くつもりですぞ」

どこへ行くつもり、信太郎は心の中でつぶやきかえした。なぜそれが云えないのか、理由はハッキリしているはずだった。行先を母親に知らせるわけにはいかないからだ。しかし、それだけだろうか。もし理由がそれだけだとしたら、なぜ前の晩、この車をたのみに行ったとき、くわしい地図でも書いて運転手にわたしておくだけの用意でもしておかなかったのか。自動車は運転手の不機嫌をそのままあらわすように、エンジンの音を鳴らしつづけた。車のまわりの人だから、ますます増えてくるばかりだ。彼等は避暑客だった。だから水死人をのぞきこむように、この立往生した車の中をのぞいてみたいのだ。これ以上、車を止めておくわけには行かない。信太郎は運転手の耳もとにささやくように云った。

「永楽園、わかる？ あそこへちょっと用があるんだ」

「エイラクエン？」

運転手は、まるでわざとのような大声で問いかえした。車のまわりで、ざわめきが始まった。運転手はラジオを止めると、ゆっくり信太郎の方をふり向いた。そして、殊更のような大げさになりながら、「はア、これだったか」と、自分の頭を指した手を空で二三次ふりまわすと、乱暴にハンドルを廻して、逆の方向にカーヴを切りなおした。信太郎は、いままで自分の抑えつけられていた不安が、突然、何者に対してともない怒りのようなものに変って行くのを感じた。

それから一年たつたいま、それが何であつたか信太郎は憶い出すことができない。ことによると、それは外へ向つた怒りではなくて単なる狼狽であつたかもしれない。どっちにしても、あの小さな事件のおかげで、自分のやっていることをまるで絵にかいたようにハッキリと眼のまえに見せつけられたことはたしかだった。あのとき彼は母親に、「これからいっしょに東京へ行く」と云つておいた。東京へかえろう。しかし、そのまえにK浜で伯母さんたちと一日ゆっくり遊んで行こう、ということになつていたので。土間につづいた茶の間のうす暗い電燈の下でそう云うと、母親はにわかに元気づいて、急に土間の上り口の踏み板を雑巾で拭いたりしはじめた……。

タクシーは上り坂にかかつていた。このあたりはもう病院の敷地だ。斜面の路の両側に桜の並木がある。

「季節になると、市内からこの桜を見にくる人が大勢おりますよ」

はじめてこの病院を下見分の意味でたずねたとき、看護人の青年がそう云つたのを憶い出した。たしかにそれは美事なものだった。満開のときは斜面全体が桜の花に包まれるにちがいない。けれどもここが花見の場所として賑わうとは考えられなかった。あまりに整いすぎてお花見にふさわしい乱雑さに欠けていた。看護人の言葉に反えつて信太郎は、満開のまま深閑としずまりかえつた花ざかりの桜の森を思いうかべた。すると樹液をしたたらせた艶のある桜の幹の一本一本が、見えない「狂気」を大地から吸いとりては、淡紅色の花のかたちにして吐き出しているようにおもわれてくるのだった。斜面の中腹から道はまた二つに分れて、

永楽園女子病棟

として、左向きに矢印をつけた立札が見える。車は一気に坂を上りつめた。と急に視野がひらけて眼の下に、小さな入江と、それをU字型にかこむ平地と、白い真新しいコンクリート造りの建物とが、たそがれどきの薄暗やみの空氣の底から、まるでデコレーションの化粧箱の色刷の絵のような風景をのぞかせた。病舎なのである。

「どうです。奇麗でしょう。なに、病院としての設備は、やっぱり地方だけにいくらか時代おくれですがね。脳外科の手術なんかもめったにやりませんし……。でも、こうやってみると病棟はじつに奇麗でしょう」

斜面の桜の自慢をした青年が、やはりはじめてきたときの信太郎に云った。桜並木に花見の客がやってくるということには、何かうなずけないものを感じた信太郎も、この「奇麗でしょう」という言葉はそのまま受け入れた。まったくのところ、その絵のような景色は美しいということに何の説明も要しないものだったふうだ。けれども、あとになって考えると青年の云ったのは、病舎そのものが衛生的で掃除が行きとどいていてという意味にもうけとれた。たしかに、そういう点でも信太郎の見てきた東京近郊の病院とくらべて、ここは奇麗にちがいがなかった。タクシーは崖のように切り立った斜面の、まがりくねった坂道を用意ぶかく下って行った。

病棟玄関には、すでに燈がともっていた。車寄せのすぐまゝに湖水のように静かな海がひろがって、まだそここには暮れのこつていたが、時刻はもはや消燈時をすぎて患者の姿は見えなかった。

「ひとつ、様子を見てくるか？」

信吉は片頬にうす笑いのようなものをのこしたまま、息子の顔を見上げながら云った。

「行きましょう」

信太郎はイラ立たしげにこたえた。——危篤の母を見舞いにきた息子なのだから、それが当りまえではないか。——しかし、燈の消えた長い廊下を懐中電燈をもった看護人に案内されて行くうちに、ふと自分の姿がひどく芝居じみたものに思われてきた。自分ははたして母に会いたいのか、会いたくないのか？　すでに正常の意識を失っているもののそばへ行ってやることに、どれだけの意味があるのだろうか？　このようにして急ぎ足に歩くことは、単に息子としてふさわしい行動

をとらなければならぬと思っただけではないのか。

「あ、こっちです」

案内の男は懐中電燈を振って云った。信太郎は、反対側の階段へ足を向けようとして、裏返しになったスリッパをはきなおしながら立ち止まった。

「こっちの方へ移しましたから……」

男は、事務的な、抗弁するような口調で云うと、先に立って歩き出した。入院させるときは、明るいまぐさの部屋をたのんであった。一体いつから部屋をかえられたのか？　しかし、いまさらそんなことを聞き出してみることは無駄におもえた。鉄の扉があった。暗闇の中から、醜えたような甘い臭いがただよいはじめた。重症患者のための個室が廊下の両側に並んでいる。どの窓にも頑丈な鉄格子と太い金網が張られ、小窓の一つ一つに「沈黙」が音になって聞える気がした。一歩あるくたびに動物的な恐怖がやってくる。案内者の懐中電燈が気まぐれに左右にふられると、金網にびったり寄せた顔がうかび上り、光った眼が吸いつくようにこちらを見ている。左側に一つだけ、半開きになった扉があった。

「ここです」

案内した看護人はカカトを踏みつぶした運動靴の足を止めた。一枚だけ畳を敷いた板貼りの部屋に、うすい藁蒲団と蒲団をかきかされて寝かされていた。

「浜口さん、どうぞね（どうだね）？」

枕もとにかがみこむと、看護人はびっくりするほど大きな声で云った。外側の窓から月光が矩形になって流れ落ちていく。懐中電燈に照らし出された母の顔は、すっかり瘦せおちているうえに、醜くゆがんで、ほとんどどこにももとの面影はなかった。看護人は電燈を一層まぢかに近よせると、眼蓋を指でみひらかせた。灰色の瞳が一点を凝視したように動かなかった。

「浜口さん、浜口チカさんよ。東京から息子さんが来たぞね。あんた

が、びっしり(しゅっちゅう)云いよった息子さんぞね」

耳もとで、どなるように云うと、看護人は信太郎に眼を向けた。扱いたれた動物を、見物人のまえていろいろ動かして、値ぶみをさせる商人の顔にみえた。

「あんたが何か話してやってごらんさい。ひょっとすると気がつくかもしれないよ」

男の、なかば職業的な声に、信太郎は命令されたように、その顔を母のそばに近づけた。汗と体臭と分泌物の腐敗したような臭いが刺すように鼻についた。しかし、その臭いを嗅ぐと、なぜか彼は安堵した気持ちになった。重い、甘酸っぱい、熱をもったその臭いが、胸の底までしみこんでくるにつれて、自分の内部と周囲の外側のものとのバランスがとれてくるようだった。いまは変型した母の容貌のなかに、まぢがいなく以前の彼女のおもだちが感じられる。いつまでも子供っぽい印象をあたえていた額は渋茶色になって深い縦皺がきざまれ、ゴム鞆のようにふくらんでいた頬は内側からすっかりえぐりとられたように凹んで、前歯一本だけをのこして義歯をはずされた口はくろくろとホラ穴のようにひらかれたままだ。それに、あんなに肥って、みにくいほど二重三重になっていた頬の肉は嘘のように消えて、頤がそのままシワだらけの喉にくっつきそうになっている。けれども、いまは次第にそれらのものが、それぞれに昔からなじんだ部分部分のなごりを憶い出させてくれる……。だがそれだからといって、この母に何か話しかけてみる気にはなれなかった。というより母であることを感じれば感じるだけ、口をひらこうとするとギョチなくなってしまうのだ。

すると男は、もはやあからさまにイラ立って、

「浜口さんよ。息子さんぞね……。わからんかね、息子が来ちよるぞね」と、母親の耳もとでドナリつけ、頭をふりながら、ことさらのように失望の表情を示すと、「しょうがない、どうしてこうわからんのだじやろう」

とつぶやいて、こんどは母の両手を取ると、はげしく上下に振りは

じめた。母親の袖口から、ほとんど骨のままのような腕があらわれた。

「いいんですよ……」と、信太郎はなぜともなしに笑いながら声をかけた。

「いいんですよ、このまましずかに眠らせてやってください」

実際、信太郎は、自分がどうして笑うのかわからなかった。四十度ちかく発熱して、この数十時間、昏睡状態をつづけたままでは母は、耳もとで声をハリ上げられたり、体をゆすぶられたりしたために、ますます困憊して行くらしく、崩れたぼろ布のように横たわったまま、あらあらしく胸を波打たせていた。……こんなとき笑うのは多分、不謹慎なことだろう。そして自分でも、おかしがる心持はすこしもないのに、気がつくと、どういうわけか頬のあたりがほほえむようにムズがゆくなってくるのだ。これは一体どうしたことだ？

信太郎は口をむすびなおした。しかし心に何か落ちつかないもののこのこった。彼は習慣的にタバコをくわえながら、病室内の喫煙が禁じられていることを憶い出した。だが、くわえたタバコをポケットにもどすのも面倒だった。

「どうですか、ひとつ」

思いついたように彼は、男にタバコの箱をさし出した。

「はア」

男は短くこたえと、小走りに部屋を出て行ったが、もどってきたときには灰皿の代用になる糊の空ビンを手にしていた。男のあとから父親の信吉が顔を出した。

信太郎は、あらためて男に向いあいながらマッチを擦った。マッチの火に浮び上った男の顔をうかがうと、頬の白さで意外なほど若い——ことによると未成年者ではないかとおもわれるほど——ことがわかった。三人が一本のマッチで火をつけるために頭をよせ合うと、その瞬間、この病棟全体にみなぎっている異様な沈黙が、まわりからひたひたと押しよせてくるのが感じられた。

信太郎は、タバコをのんでいる父親の顔がきらいだった。太い指先につまみあげたシガレットを、とがった唇の先にくわえると、まるで窒息しそうな魚のように、エラ骨から喉仏までぐびぐびとうごかしながら、最初の一ぶくをひどく忙しげに吸いこむのだ。いったん煙をのみこむと、そいつが体内のすみずみにまで行きわたるのを待つように、じっと半眼を中空にはなっている……。吸いなれた者にとつては、誰だってタバコは吸いたいのにきままっている。けれども父の吸い方は、まったく身も世もないという感じで、吸っている間は話しかけられても返辞もできないほどなのだ。

——この病院でも、患者たちは何よりもタバコに餓えている。だから看護事務室や医務室の灰皿は、いつ見ても洗ったばかりのように奇麗だ。ちょっとした隙を見すまして、誰かが吸いさしを捨てて行くからだ。タバコだけ手に入れても、患者たちはマッチが渡されていないが、彼等は丹念に石を擦り合せたり、天井に上って電線をショートさせたりして火を点ける。「まったくのところ、患者というやつは常人の及ばんことを考えつきますからね、われわれはもう油断もスキも出来んですよ」

若い看護人のそんな話をきくともなしに聞きながら、信太郎は父母といっしょに暮した鰹沼海岸の家のことを憶い出していた。終戦の翌年*。父は階級章を剥ぎ取った軍服に、革製のふしぎな型のリュックサックを背負った姿で、南方から送還されてくると、屋敷の一隅で捕虜收容所の生活をはじめた。庭じゅうを掘りかえして、麦やヒエや雑多な植物をうえながら、門の外へは一步も出ず、ひたすら外界との接触を怖れていた。收容所の中で縫装兵につくらせたというリュックサックには、洗面器と兼用になる食器だの、星型にひろがる蚊帳だのと、奇妙なものが収めこまれていたが、それらはすべて父親にとってタカラモノだった。一日に何度となく、その中を覗きこんで仔細げに一つ一つ取り出して眺め、あらためてまた長い時間をかけて収め

なおす。それがおわると、手製の水牛の角のシガレット・ホルダーに飯盒から取り出した「ほまれ」*を差しこんで、惜しそうに少しずつカビ臭いけむりを吐き出すのだ。

手垢に汚れた竹の筒も宝物の一部だった。黒いゴマ粒大のものが入っていた。香辛料とタバコの種子だという。それは庭の畑にまかれると、ちょうど飯盒の中の「ほまれ」がつかえるころ、真青な葉をしげらせた。父はその葉を二三枚ずつ摘みとると、縁側に並べて日に乾し、かわいたところを見はからって、パイプにつめては、れいによって惜しそうに一ぶくずつ胸の奥まで吸いこんで夢見ごちちに半眼を閉じた。ところが、それから二三日たつと、父は日に焼けた額に蒼黒い汗をうかべて寝込んだ。それまでは人一倍旺盛だった食欲もなくなり、二三時間おきに嘔吐した。母は医者呼ぶために、なけなしの衣料を何点か売り払った。無収入の一家にとつて、それは今後何週間か生きのびられるだけの食費にあたる金額だったが、吐瀉物のなかに焦茶色の血液に似たものが交っているの、放つてはおけなかった。……やってきた医者には診断がつかず、結局一週間ほどのちに病人はひとりで回復したが、あとになって病氣の原因が自家製タバコの吸いすぎであったことがわかったときには、安心するよりも腹立たしくさらに、滑稽でもあった。

「どうです、そろそろ休まんと、体がエライでしよう」

タバコを切り上げた看護人が云った。先刻にくらべると、その口ぶりに親切さが感じられた。しかし、病棟の外に別の部屋が用意してあるからと云われても、信太郎は体をうごかす気になれなかったの、そうこたえた。すると、看護人はまた少し身がまえる様子になった。「このぶんなら、今晚は大丈夫ですよ。何かあったら、すぐ知らせます。……東京から真直ぐこられたのなら、つかれなさったでしよう」と、その語調はねぎらうよりは、強制的に追い立てようとするひびきがあった。

「迷惑でしょう。僕はちっとも眠くはないんですが」
眠くないのは本当だった。しかし、それよりも立ち上ることの方がもっと面倒だった。

「迷惑なことはありません」

看護人はこたえながら、懐中電燈をもう一度、母の顔に向けて、枕もとにしゃがみこんで、しばらく考えこむそぶりをした。その様子から、たしかに彼が迷惑していることがわかった。

「外から、鍵はかけるんでしょうか？」

信太郎は、I市の精神病院に友人の細君を見舞に行ったときのこと
を憶い出しながら訊いた。看護人はまともに答えた。

「いいえ、浜口さんの部屋には、もう鍵はかけません」

蚊のうなる声が耳もとで聞えた。蚊やり線香を持ってきたもらえないものだろうかと思つた。しかしタバコが禁止されているのなら、蚊やりも止められているにちがいないと思ひなおして、それはやめた。看護人は懐中電燈を片手に部屋の戸口に立つたまま、信太郎を無言で眺め下ろした。信太郎は壁に背をもたせ、床板に尻をついたままで云った。

「いいですよ、今晩はぼくがここで見ていますから、あなたは自分の部屋で眠った方がいい」

「……………」

看護人は何か云いたそうに唇をうごかしかけたが、途中からムツとしたように口を閉じた。廊下の螢光灯に顔の半面だけが青くてらされている。信太郎は、はじめて自分の云ったことが、何かで看護人の心を傷つけたらしいと気がついた。——けれども、いったい何がイケなかったのだらう？ そのときだった、部屋の真暗なすみに黙然と坐っていた父親が不意に立ち上ると、「信太郎、いいかげんにして、もう寝んか」と大声に云って、先に立って部屋を出た。

一瞬、信太郎はそのげいしい語調に反撥を感じた。しかし、その直後に彼は突然、看護人や父親が、何かイラ立ち、何を怒っているかを

理解した。彼等は、おれが「孝行息子」ぶろうとしていっているのではないか？ 一番おくれてやってきたくせに、いきなり前の席に割りこもうとして、せり出した肩を、無言でぐっと押しかえす、そんな強さが、黙って廊下を歩き出した父親の信吉のこぼれた背中を感じられた。と同時に、廊下の両側にならんだ鉄格子のはまった小窓から、いつせいに声にならない唸り声が、どっと自分に向って流れ出してくるような気がした。看護人が、しずかに、満足したようにウナズクを見ながら、信太郎はスリッパの爪先に力をこめて父親のあとを追った。

翌朝、信太郎は海から上ってくる太陽の光で目をさました。病棟玄関の真上にあるその部屋は、海に向って大きく窓をひらいている。高知湾の入江の一隅に小さな岬と島にかこまれた、湖水よりもしずかな海は、窓の直ぐ下の石垣を、黒ずんで重そうな水でひたひたと濡らしていた。空は一面に赤く、岬や島を鬱蒼と覆いつくした樹木は、緑の濃さをとりこして黒ぐろと見える。

窓の景色をながめたあとで、信太郎はもう一度床に入った。木の枠の上にタタミをしいた寝台は清潔で快適だったが、射しこんでくる朝日で部屋じゅうが真赤なので眠れない。しかし起き上ろうとすると、全身がだるくなつてその気になれない。前々日の夜おそく、信太郎は友人と新宿の酒場にいた。背の低い、黒いロイド眼鏡をかけた男が友人に何か話しかけていた。彼等は肩を抱いたり、笑ったり、要するに上機嫌に、必要以上の親しさを見せ合っていたようだ。それがどうして、この男と争うことになったかはわからない。気がつくやうに信太郎はコップのかけらを握っていた。カウンターの台には、考えられないほど細かく割れたガラスの破片が飛び散って、眉をひそめた女が何か云うと、それにつれて他の女たちは腰をかがめて右往左往していた。床に尻をついた背の低い男は立ち上って眼鏡を拭いた。眼鏡をはずしたその顔に善良そうな笑いがうかぶのを見ると、信太郎は自己嫌惡に

頬の青ざめるのを感じながら外へ出た。友人があとから追いかけてきて、二人は別の店へ入った。黒いドレスを着た大きな女がやってきて、彼のとなりに腰を下ろした。「次の日曜日どこかへ行こう」と云うと、女は承知したしるしに首を振って、分厚い胸をよせてきた。あけ方ちかく家へかえると、母の危篤を知らせる電報がとどいてた。……あくる日の昼間は旅費の工面に追われてすごした。夕方、やっと仕度のととのったところで、女との約束を憶い出し、わたされていたアドレスに電話した。女はアツ気ないほどあっさりとしの次第を了承した。考えてみると、「おふくろがキトクで、日曜日には行けそうもない……」というのは、いかにもこんな場合に使われる嘘の典型みたいなのだ。死にぎわまで、母が自分の色事に邪魔をしているのかとおもうと、おかしかった。実際、これまでもイザというところ、母親が出てきたために事がこわれた経験は何度もある。

前兆というものを、ことさら信太郎は考えようとしたわけではなかった。それに、この前々夜の行動はふだんのとおりではないにしても、特別に変わったことでもない。ただ、自分がいま疲れているということを感じ出してみただけだ。

さっきと較べると、射しこんでくる光線も、よほど赤味がとれていった。普通の朝の明るい日ざしに変わった。しかし目をつむってみると眠れないのは、やはり前と同じだった。となりの寝台を見ると、父親がまるめた背をこちらに向けて眠入っていた。頸筋のふとい、いかり肩の、骨組のガツリした背中だ。他人の眼からみると、信太郎はこの父親に似ているようだ。顔立から体つきまで、おかしいぐらいソックリだという。母親のチカはいつもそのことを嘆いていた——彼女は不思議なほど夫を嫌っていた。信吉のあらゆる点が自分の好みでないということを、何十年間にわたって誰彼の別なく話してきかせた。一人息子である信太郎はとくに、結婚式の当日に花婿の信吉の水色の紋服を着た姿がどんなにイヤらしいものであったかということだけでも、何千遍となく聞かされた。「なにしろ、あたしは見合ひとつせず

婚させられたんだからね。式の日になって、頭を青ゾリゾリに丸めた人が、首をカメの子みたいに着物の襟からつき出して、ノソノソこっちへやってくるのを見たときは、おおかた田舎の婚礼のことだからお寺の坊ざんまで式に招んだのかと思っていだら、なんとそれが婚ざんと聞かされて、あたしはほんとに、その場で逃げて帰ろうかと思ったよ」。父の生家は土地では旧家といわれているが、高知県下のY村だ、母は銀行員の娘として東京で生れて、大阪で育った。そんなクイチガイから出る不平も、母の信吉嫌いの中にあつただろう……。どっちにしても、自分も父が嫌いになったのは、この母の影響のせいにちがいない。父のすることなすことは、食べ物このみから職業のえらび方まで一切合財、ことの大小にかかわらず、みな好ましくないものとして教へこまれてきたのだから……。たとえば彼が父の職業を恥ずかしがり出したのは、こんなことがあつてからだ。ある引越して間もない家で、信太郎は母と台所となりの茶の間でコタツにあたつていた。勝手口から御用聞がやってきて、母はコタツの中から応対していたが何かのことで御用聞が「おたくの旦那は軍人さんですってね」と問いかけた。ちょうど満洲事変²のはじまって間もないところで、少年雑誌の読物やマンガに戦争物が人気を上げていたからだ。御用聞の小僧は父の階級は何だとか、サアベルは何本ぐらい持つものかなときいたあげく、

「旦那さんは騎兵ですか」と云った。

「そうじゃないよ」母はこたえた。

「へえ? じゃ何です」

(獣医だ)と信太郎はこたえようとして、コタツの下から母の手で足をギョッとつかまれてしまった。そして母は、「さあね」と、急に冷淡な口調でこたえてから、信太郎の顔をじつと見て黙った。そのとき母の羞恥心が端的に息子の心にのりうつった。それは爪を立ててつかまれている足の痛みといっしょに、ヒリヒリと痛いような恥ずかしさを彼の心に植へつけた。と同時に、そんなつまらないことを恥じた母

の態度がまた彼を傷つけた。それ以来、学校の調査カードや何かに、父の職業を「軍人」と書きこむだけで信太郎は落ち着かない心地がし、それは終戦になって職業軍人が消滅するまでつづいた。

いつの間にかウトウトと眠入ったのだろう。入口のままで立ち止る靴音をきいたとき、ギクリとして跳びあがるように、上半身を寝台から起こした。ドアを開けて入ってきたのは、ゆうべの看護人だった。昨夜とはまた感じが変わって見える。細面の白い顔で、口のまわりにウブ毛のような不精ヒゲがまばらに生えかかっている、要するに何べん見ても年齢のわからない顔だ。フチなしの眼鏡のおくに、ふくらんだ眼球を無表情に光らせながら、寝台のわきのテーブルをその不器用な手つきで拭くと、アルミニュームの盆をガタガタいわせながら、その上に置いた。朝の食餌を運んできたのだった。味噌汁の碗、漬物の小皿、それに飯のつまったアルマイトの弁当箱が二つずつ並んでいる。飯は弁当箱のをそのまま食うらしい。

男が部屋へ入ってきたときから、信太郎はひどく落ちつかない気持だった。この男が食餌を運んでくれたのは、特別のサーヴィスによるものだろうか、それとも見舞客に対する単なる慣例なのだろうか？ そんなことが変に気になった。

これは患者の食べるものと同じものか、と彼は訊いた。

「そうです」と、看護人はぶっきら棒にこたえ、弁当箱のフタをとって逆さまにすると、なかへ煮えかえった番茶を注いで、「どうぞ、ごゆっくり」とだけ云って、せかせかした足どりで出て行った。

食欲はなかったが、箸をとってみると、意外にもひどく空腹になって、手にすしりと重い弁当箱の飯がいくらかでも食えた。飯はしめり気があって、噛むといくらか甘いような金属の臭いがする。ときどき冷く固くこんだ米が胸を内側から擦るように胃袋へ下りて行くのがわかった。

信太郎は、しかし一と握りほどの飯をのこしたまま箸を置いた。眼の前に父親が、弁当箱の中にまだ半分以上も残った飯をゆっくりと口

にはこんでいるのを眺めていると、ふとまた得体のしれぬ不安がやってきたからだ……。ふだんから父は存分に時間をかけて咀嚼する方だ。ひと口ひと口、噛みしめるたびに、脱け上った広い額の下で筋肉の活動するさまがハッキリ見える。乾いた唇のはしに味噌汁に入っていたワカメの切れはしが黒くたれさがっているのも知らぬげに、口は絶え間なくうごいており、やがて噛みくだかれたものが食道を通過するしに、とがった喉仏が一二本剃りのこされて一センチほどの長さのびた不精ヒゲといっしょに、びくりと動く。まるでそれは機械が物を処理して行く正確さで、ある種の家畜が自己の職務を遂行している忠実ささを見るようだ。……そのときだった、父親はふと眼を上げた。眼と眼が合った。

「食わんのか？」

父は、信太郎を上眼づかいに見ると、弁当箱のフタから冷えた番茶をすすりこみながら云った。

「うん。……これでも、ふだんよりは、余計に食った」

「ふん」父親は額と鼻に汗のつぶを浮べながら、飯粒や黒い殻のよどんでいる茶を、もう一度口にくんだ。

「このメシは、なかなかウまい。米の質が、いいんだ。お前たち、東京の配給米ばかり食っている者には、こんなことを云ったってわからんだろうが……」

口の中で入れ歯の位置をなおそうとしているらしく、言葉の半分は聞きとれなかった。しかし、どっちにしてもそれは大して問題になるはずのことではなかった。ことによると父は、息子が両親を田舎において、一人だけ都会でくらすことについて話したかったのかもしれない。しかし、それもいまさら何と云われたって仕方のないことだ。

信太郎は寝台の上に横になった。その方が気分が落ちつくかもしれないと思っただけだ。しかし、結果はすこしも良くなかった。天井の漆喰が眼に痛いほど白くて、ニスと何か刺激性の臭いが鼻についた。射しこんでくる日ざしの角度がにぶくなるにつれて、暑くなってきた。